父母と保姆との協力

奈良女子高等師範學校教授
附屬幼稚園主事　森川正雄

親が贅澤をして見せるから、子も慣れて贅澤家になる。親が平氣で嘘を言ふから、子もまねて嘘吐きになる。親が怒りつぽくて子が怒りつぽくなる。親が人のことを聞いたら、いつでも嘲るから、子も亦冷嘲の癖を傳へられる。かういふ樣に親の性癖を暗示と模倣とによつて傳へられて居る多くの子供があるが、又他方には親が性急で、命じた事を直にせぬと怒るから、子はいつでも口だけでは直に「ハイ」と答へておいて、さて實行は悠々とする。遲いではないかと咎めらるれば、何の彼のと言草で間に合はせる。かうして口實上手のごまかし家となる。子供を上品な人柄に躾けようとばかり思ひ過ぎ、婢僕からも遠ざからせ、お使にも、器物の持運びにも、來客の應待にも出さぬから、子供は他所でも自家でも、氣の利かぬ、無器用な、無愛想な超然主義者になつて仕舞ふ。俗流から超然として居るといへば聞えはよいが實は一種の木偶漢である。子供のかやうな性格は模倣によつて出來たのでなく、子供がやむを得ず取つて居る環境適應の生活態度に外ならぬ。貧家の子女が貧のさげすみに奮激して學科の方に力を込め、級中の優等生となつて自ら慰めて居るのと同じい補償的方法である。かういふ場合には子供は親に似たものと成らずに却つて反對のものになつて仕舞ふ。

新聞の三面記事は吾々に日々、多くの參考資料を供給する。親に似て惡化した子、親が嚴格過ぎるから子が陰で惡遊びをしたもの、子供が子供を裁判して危險に陷れたもの、母子の關係は濃かで死を共にするに、夫婦の間と、父子の關係は至つて冷淡で父は何處に行づたか分らぬといふもの等々、實に千種萬樣である。

以上は唯、僅ばかりの例をあげたに過ぎぬが、要するに父母は自己の不完全から、幼兒の性格形成の上に惡影響を與へて居ることの如何に多いかを悟得せねばならぬ。然るに世の多くの親達の態度はどうであるかと言ふに、只一途に子供の缺點を叱るだけである。尤も子が憎くてゞなく、可愛いから叱つて居るのであるが、併しその缺點の眞原因が何處にあるかに氣付かぬから、從つて、之を矯正する良手段にも思ひ及ばぬのである。

昔は『子を易(カ)へて教へた』と古い書物に見えて居るが是は親達が自分の性格、知識、才能の不十分なる事や、又親の慾目でとかく自分の子を高く見過ぎる事や、又親は愛が過ぎ、情に負けて、我が子の我儘をつひ〳〵許す事などある爲に、互に『他人の子』として教へ合つたと思はれる。誠に賢明の態度と言はねばならぬ。

今の幼稚園は人の子を集めて教育する所である。此の古人の理想が最も能く實現され得る所だと言ふべきである。此處にては、專門の教育者たる保姆が父母に代つて幼兒の保育に當るのである。此處にては、前に掲げた樣な父母の缺點が補はれて、子供は良い模範をまねることが出來る。又好い環境が與へられるから、良い生活態度が現れ出づべく、良性格が形成せられるに適する。幼稚園の任務は家庭教育を補ふことを一要事として居るが、前述の點から考へても、能く家庭教育に貢獻し得ると言へる。

併し、更に進んで考へねばならぬ事がある。それは保姆も亦、有限の存在者であるから、完全の人格者たらざることに於て、幼兒の父母に同じと言はねばならぬ。固より專門の事柄については蘊蓄はあるにしても、自ら子を產み育てたといふ經驗に於ては却つて幼兒の父母を師として學ぶべき事があるであらう。それゆえに、父母と保姆とは互に緊密に相提携補助して幼兒を保育せねばならぬのである。父母と保姆とは共に自己の弱點を省み、常に修養と研究とに勵み、長短相補ひ以て幼兒を善導せねばならぬ。かくして始めて幼兒は安全に完成の道を進むことが出來るであらう。